

2025 年度業務実績報告書

提出日 2026 年 1 月 16 日

1. 職名・氏名 准教授・瀧澤 文雄

2. 学位 博士(獣医学)、専門分野 魚類免疫学、授与機関 日本大学、授与年月 2008 年 3 月

3. 教育活動

(1)講義・演習・実験・実習
① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等 生物学実験（1 単位）、2 年生
② 内容・ねらい 光学顕微鏡の使い方を身につけ、単・多細胞生物の細胞の仕組みや発生を理解する。また、ウニの発生について理解する。
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫 実験の手引きを利用して、実験の目的、注目点などを共有させた。
① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等 魚類免疫学実験（1 単位）、2 年生
② 内容・ねらい 魚類の免疫活性を調べるために、免疫機能を定量的に測定する。
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫 学生が主体的に、実験の目的・意図を理解できるよう解説するとともに、班全体で協力して実験を行うよう促した。
① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等 魚類免疫学（2 単位）、2, 3 年生
② 内容・ねらい 動物が病気から守る免疫系の仕組みについて学ぶ。
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫 免疫学に興味を持てるように、身近な例を取り入れつつ、分かりやすい説明を心がけた。
① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等 分子生物学（2 単位）、2 年生、3 コマ
② 内容・ねらい 生物の示す種々の生命現象の分子としての担い手である核酸やタンパク質の合成経路について学ぶ。
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫 講義を集中して聞くようにスライドに空欄を設定した。また、生物学での内容も復習し、講義がつながっていることを意識させた。
① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等 生物学 I（2 単位）、1 年生、4 コマ

② 内容・ねらい
生物が活動する仕組み、特にその原理をよく理解し、適切な用語を用いて説明することができる基礎知識を習得する。
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫
1年生が対象で、高校で生物基礎しか学んでいない学生も考慮し、レジュメを配布し、わかりやすい内容を心がけた。
① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等
専門科学英語（2単位）、3年生、15コマ
② 内容・ねらい
研究室に関連した英語の科学論文や書籍を読み、論文の読み方と専門用語を理解する。
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫
予習をさせることで、科学論文を読むことを慣習化するように工夫した。
① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等
基礎演習（1単位 毎年開講）3年生 15コマ
② 内容・ねらい
研究室に関連した研究内容の文献を理解し、その内容の発表・討論の方法を学ぶ。
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫
発表要旨を予め読むことおよび積極的な議論を促した。
① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等
専攻演習（2単位）、4年生、30コマ
② 内容・ねらい
研究室の研究内容に関連する論文を読解し、その内容について発信・議論する能力を培う。
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫
発表した論文の内容と自身の研究がつながるよう考えさせた。
① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等
卒業論文（8単位） 4年生 240コマ
② 内容・ねらい
3年次までに修得した学習成果を踏まえ、研究室のテーマに即した社会的背景や専門分野の研究課題に取り組む。
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫
研究の進め方や方法について、学生と頻繁にやり取りをし、論理的な考え方や課題の解決法を身につけさせるよう促した。
① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等
海洋生物培養学（2単位） 修士課程 5コマ
② 内容・ねらい
魚類の増養殖技術に関わる生理学・行動学・免疫学・病理学における研究概略を講義・討論し、増養殖の現状と問題点について理解する。

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫 専門分野の最近の発表論文などを交えて、魚類の免疫学や病理学の最新の事例を紹介した。
① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等 海洋生物培養学専攻演習Ⅰ（2単位） 修士課程 30 コマ
② 内容・ねらい 海洋生物の生理学・生態学・免疫学に関わる論文を読解して紹介することにより、専門的分野の知識を高めるとともに、取りまとめやプレゼンテーションの能力を身に着ける。
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫 修士論文の内容に関わる論文を紹介し、個別にも論議を行うとともに、研究の方向性などについて議論した。
① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等 海洋生物培養学専攻実験Ⅰ（4単位） 修士課程 120 コマ
② 内容・ねらい 海洋生物の生理や免疫系に関わる実験を行い、研究の計画立案および実施並びに結果の解析・まとめ・発表する能力を養う。
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫 修士論文の研究について、仮説およびその検証方法について議論を行い、自ら課題を検証する能力を身に着けるよう取り組んだ。
(2)その他の教育活動
内容 ①担当科目名（単位数） 開講学校名
②内容・ねらい（自由記述）
③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）
④本学における業務との関連性（自由記述）

4. 研究業績

(1)研究業績の公表	
①著書	【0本】
② 学術論文（査読あり）	
1. Ding Y, Fernández-Montero A, Mani A, Casadei E, Miyazawa R, Zhou C, Chaumont L, Posavi M, Cole SD, Shibasaki Y, Takizawa F , Salinas I, Sunyer JO. Secretory IgM regulates gut microbiota homeostasis and metabolism. <i>Nature Microbiology</i> . 2025 May 23:1-6. 2. Kong W, Wang X, Ding G, Yang P, Shi Y, Cai C, Yang X, Cheng G, Takizawa F , Xu Z. Newly discovered and conserved role of IgM against viral infection in an early vertebrate. <i>ELife</i> . 2025 Sep 4;14:RP104465. 3. Tohru Mekata, Tadashi Isshiki, Hiroaki Suetake, Fumio Takizawa, Kei Nakayama, Shin-Ichi Kitamura, Toshiaki Miyadai. Genome sequencing and analysis of the kuchijirosho virus identify it as a novel member of the family Amnoonviridae within the order Articulavirales. <i>Archives of Virology</i> , in press 4. Fumio Takizawa, Fumiya Ito, Chiaki Ose, Koki Kakita, Gakuto Nakazono, Ryuto Iguchi, Eiji Miyawaki, Reito Kamimura, Daisuke Shimizu, Tomoki Maeda, Hideaki Matsui, Hirokazu Suzaki, Kei Zenimoto, Atsushi Ido, Miwa Kuroyanagi, Masatomi Hosoi, Masahito Matsukawa, Yasutoshi Yoshiura, Masami Hamaguchi, Maki Ohtani, Toshiaki Miyadai, Hiroaki Suetake. Anisakis larvae in live-caught chub mackerel from Japan: tissue-specific distribution and sibling species identification. <i>Fisheries Science</i> , In press.	
【4本】	
③ その他論文（査読なし）	【0本】
④学会発表等	
1. ○米加田 徹・渡邊駿太郎・石橋成豊・宮台俊明・末武弘章・瀧澤文雄・仲山 慶・北村真一・一色 正 2. トラフグ口白症原因ウイルスのゲノム解析、令和7年度 日本魚病学会春季大会、東京大学弥生講堂、102、令和7年3月17日（月）～3月18日（火） 3. ○棚尾 咲・永田みのり・宮台俊明・末武弘章・瀧澤文雄・仲山 慶・北村真一・一色 正、口白症実験感染トラフグにおける口白症関連 RNA の局在、令和7年度 日本魚病学会春季大会、東京大学弥生講堂、103、令和7年3月17日（月）～3月18日（火） 4. ○大谷真紀・瀧澤文雄・末武弘章・井ノ口 繭・渡邊壮一・桑野 暁・杉本剛士・井戸篤史、海水馴致ニジマスにおける自然免疫の活性化、令和7年度 日本魚病学会春季大会、東京大学弥生講堂、322、令和7年3月17日（月）～3月18日（火） 5. ○宮脇 英慈、瀧澤 文雄、宮台 俊明、末武 弘章、ニジマス組織に局在する CD4-1+大型細胞における特徴、日本比較免疫学会第36回学術集会、宮崎大学錦本町ひなたキャンパス、C3、令和7年8月29日～31日 6. ○井口 隆斗、瀧澤 文雄、藤原 涼輔、柴崎 康宏、末武 弘章、ニジマスにおける IL-4/13 family 産生細胞の探索、日本比較免疫学会第36回学術集会、宮崎大学錦本町ひなたキャンパス、C4、令和7年8月29日～31日 7. ○渡邊 翔太、橋場 竣平、藤原 涼輔、瀧澤 文雄、間野 伸宏、柴崎 康宏、硬骨魚類における免疫記憶誘導組織の探索、日本比較免疫学会第36回学術集会、宮崎大学錦本町ひなたキャンパス、D3、令和7年8月29日～31日 8. ○邵 晨凱・瀧澤 文雄・末武 弘章、トラフグ分泌型 IgD とその受容体の発現解析、令和7年度 日本魚病学会秋季大会、岡山理科大学今治キャンパス、202、令和7年9月11日（木）～9月12日（金） 9. Shota Watanabe, Shunpei Hashiba, Ryosuke Fujihara, Fumio Takizawa, J Oriol Sunyer, Nobuhiro Mano, Yasuhiro Shibasaki, The impact of splenectomy on antibody responses in teleost fish. 5th ISFSI conference, National Cheng Kung University, Tainan, Taiwan (R.O.C.), 4th Nov. – 8th Nov. 2025 10. Ryuichiro Miyazawa, Alvaro Fernández-Montero, Yang Ding, Fumio Takizawa, J Oriol Sunyer, Characterization of CD4 T lymphocyte subsets in systemic and mucosal lymphoid organs of Atlantic	

salmon. 5th ISFSI conference, National Cheng Kung University, Tainan, Taiwan (R.O.C.), 4th Nov. – 8th Nov. 2025 11. Yuto Shimizu, Takuma Yakura, Maki Ohtani, Fumio Takizawa, Hiroaki Suetake, Where do ellipsoid macrophages come from in teleost? 5th ISFSI conference, National Cheng Kung University, Tainan, Taiwan (R.O.C.), 4th Nov. – 8th Nov. 2025 12. Fumio Takizawa, Hiroumi Ueno, Kazuya Yamamoto, Takuma Yakura, Yuto Shimizu, Yasuhiro Shibasaki, Maki Ohtani, Toshiaki Miyadai, Hiroaki Suetake. Characterization of IgM antibodies and IgM-expressing cells in genetically modified zebrafish. 5th ISFSI conference, National Cheng Kung University, Tainan, Taiwan (R.O.C.), 4th Nov. – 8th Nov. 2025 13. Yang Ding, Alvaro Fernandez-Montero, Amir Mani, Elisa Casadei, Ryuichiro Miyazawa, Congjin Zhou, Lise Chaumont, Marijan Posavi, Stephen D. Cole, Yasuhiro Shibasaki, Fumio Takizawa, Irene Salinas, J. Oriol Sunyer. Secretory IgM regulates gut microbiota homeostasis and metabolism. T4-O-05. 5th ISFSI conference, National Cheng Kung University, Tainan, Taiwan (R.O.C.), 4th Nov. – 8th Nov. 2025 14. Ehdad Abdelsalem, Takuya Yamaguchi, Ryuto Iguchi, Yasuhiro Shibasaki, Hiroaki Suetake, Uwe Fischer, Fumio Takizawa. CD8 loci in rainbow trout (<i>Oncorhynchus mykiss</i>): Association of single CD8α with dual CD8β isoforms. 5th ISFSI conference, National Cheng Kung University, Tainan, Taiwan (R.O.C.), 4th Nov. – 8th Nov. 2025 15. Eiji Miyawaki, Fumio Takizawa, Peng Yang, Weiguang Kong, Zhen Xu, J Oriol Sunyer, Toshiaki Miyadai, Hiroaki Suetake, Characterization of CD4-1+ myeloid cells localized in tissues of rainbow trout (<i>Oncorhynchus mykiss</i>). 5th ISFSI conference, National Cheng Kung University, Tainan, Taiwan (R.O.C.), 4th Nov. – 8th Nov. 2025 16. Kana Hagiwara, Fumio Takizawa, Nobuhiro Mano, J Oriol Sunyer, Yasuhiro Shibasaki. Functional characterization of rainbow trout perforin-1. 5th ISFSI conference, National Cheng Kung University, Tainan, Taiwan (R.O.C.), 4th Nov. – 8th Nov. 2025	【16 件】
⑤その他の公表実績	【0 本】
(2)科研費等の競争的資金獲得実績	
【学外】 1. 基盤研究(B) 23H02312 (研究代表者・継続)、魚類粘膜組織におけるヘルパーT 細胞による抗体産生誘導機構 2. 特別研究員奨励費 23KF0273 (研究代表者・継続)、魚類ウイルス性旋回病に対する診断法およびキラーT 細胞誘導性 DNA ワクチンの開発 3. 基盤研究(B) 21H02288 (研究分担者・継続)、魚類の特異的抗体産生メカニズムを探る 4. 基盤研究(B) 25K02100 (研究分担者・新規)、マスト細胞と好塩基球の魚種による違いはなぜ起こるのか？ 【学内】 1. 戦略的課題研究推進支援事業 2. ステップアップ研究支援 (個人研究推進支援)	
(3)特許等取得	
(4)学会活動等	
【学会での役職】 日本比較免疫学会・広報担当 【表彰】	

5. 地域・社会貢献活動

⑥公開講座

該当なし

⑦その他

恵那高校令和7年度 サマーサイエンスセミナー、ウニの受精実験・講師、7月

6. 大学運営への参画

(1)補職

(2)委員会・チーム活動

(全学)

- ・動物実験委員会 2020年4月～現在に至る
- ・国際委員 (2025年4月～)

(学部・学科)

- ・クラス副担任 2020年度入学生
- ・臨海センター運営連絡会議 2022年4月～現在に至る
- ・オープンキャンパス担当 2018年4月～現在に至る

(3)学内行事への参加

(4)その他、自発的活動など

献血回数 54回